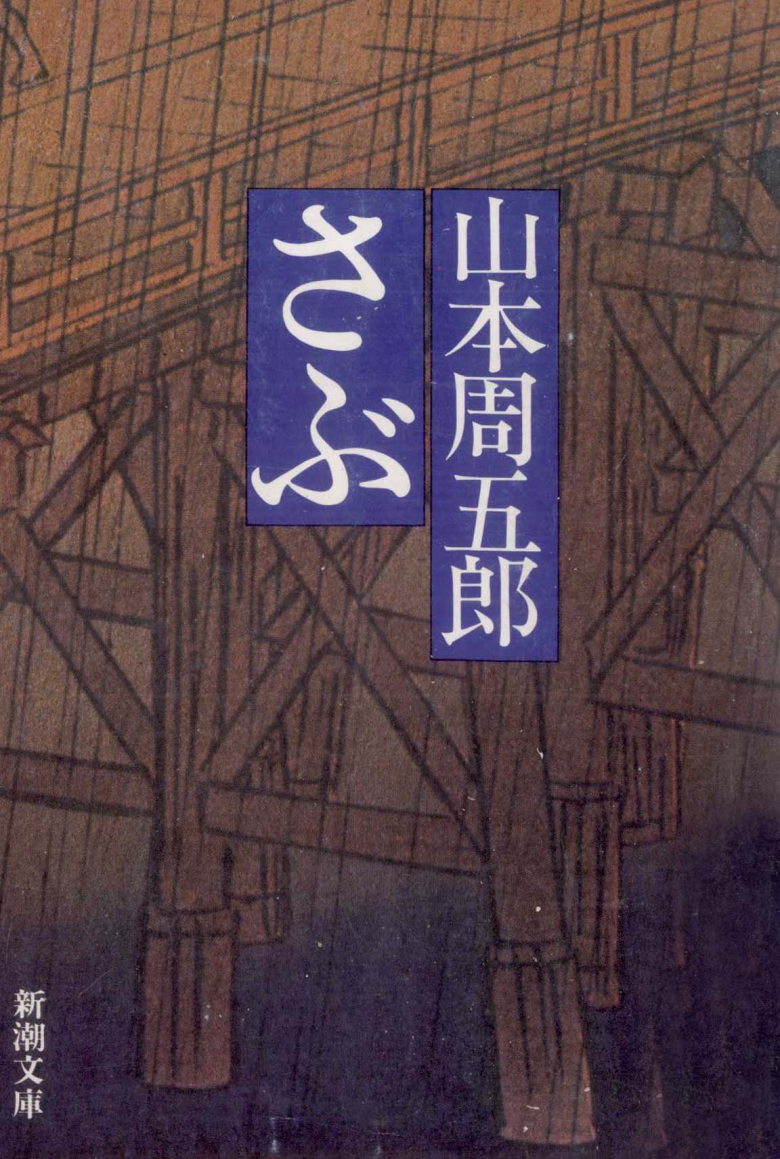




山本周五郎

さぶ

さ

ぶ

新潮文庫

や - 2 - 10



昭和四十年十二月二十五日 発行

昭和五十一年七月二十日 二十一刷改版

平成九年七月二十五日 六十四刷

著者 山本 周五郎
やまもと しゅうご

発行者 佐藤 隆信

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

編集部(〇三三三六六―五四四〇

電話 読者係(〇三三三六六―五一一一

振替 〇〇一四〇―五八〇八

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・錦明印刷株式会社 製本・錦明印刷株式会社

© Tōru Shimizu 1963 Printed in Japan

ISBN4-10-113410-3 C0193

新 潮 文 庫

ち

ぶ

山本周五郎著

新 潮 社 版

1714

ち

ふ

小雨が霏もやのようにけぶる夕方、両国橋を西から東へ、さぶが泣きながら渡っていた。

双子縞ふたごじまの着物に、小倉こくらの細い角帯、色の褪あせた黒の前掛をしめ、頭から濡ぬれていた。雨と涙とでぐしよぐしよになった顔を、ときどき手の甲でこすするため、眼のまわりや頬が黒く斑まだらになっている。ずんぐりした軀からだつきに、顔もまるく、頭が尖とがっていた。——彼が橋を渡りきったとき、うしろから栄二が追って来た。こっちは瘦やせたすばしっこそうな軀からだつきで、おもながな顔の濃い眉と、小さなひき緊しまった唇が、いかにも賢さそうな、そしてきかぬ気の強い性質をあらわしているようにみえた。

栄二は追いつくとともに、さぶの前へ立ち塞ふさがった。さぶは俯うつむ向いたまま、栄二をよけて通りぬけようとし、栄二はさぶの肩をつかんだ。

「よせたら、さぶ」と栄二が云った、「いいから帰ろう」

さぶは手の甲で眼を拭き、咽むせびあげた。

「帰るんだ」と栄二が云った、「聞えねえのか」

「いやだ、おら葛西かさいへ帰る」とさぶが云った、「おかみさんに出ていけて云われたんだ、もう三度めなんだ」

「あるきな」と云つて栄二は左のほうへ顎をしゃくつた、「人が見るから」

二人の少年は橋のたもとを左へ曲つた。雨は同じような調子で、殆んど音もなくけぶっていた。「おらほんとに知らなかったんだ」とさぶが云つた、「ゆうべ粉袋を戸納へしまつてたときに、勝手に使うから一つ出しておけて、おかみさんに云われた、だから一つだけ残しといたんだ、そしたらその袋が出しつ放しになつて、おかみさんは使つたあとでしまつとけて、その袋を返したのに、おれがしまい忘れたつていうんだ」

「癖だよ、癖じゃねえか」

「粉が湿気をくっちゃつた、へまばかりする小僧だつて」さぶは立停つて、手の甲で眼のまわりをこすりながら泣いた、「——おら、返してもらわなかった、そんな覚えはほんとにねえんだ、ほんとに知らなかったんだ」

「癖だつてば、おかみさんはなんとも思つちやあいねえよ」

「だめだ、おら、だめだ、ほんとにとんまで、ぐずで、——自分でも知つてた、とても続けられやしねえ、もうたぐさんだ」さぶは喉を詰らせた、「おら、思うんだが、いっそ葛西へ帰つて、百姓をするほうがましだつて」

広い河岸通りの、右が武家屋敷、左が大川で、もう少しゆくと横綱になる。折助とも人足ともわからない中年の、ふうていのよくない男が二人、穴のある傘をさして、なにかくち早に話しながら、通りすぎていった。その男たちの、半纏の下から出ている裸の脛が、栄二にはひどく寒そうにみえた、さぶはあるきだしながら、小舟町の「芳古堂」へ奉公に来てから三年間の、休む暇

もなくあびせられた小言と嘲笑と平手打ちのことを語った。それは訴えの強さではなく、赤児のなが泣きのような、弱よわしく平板なひびきを持っていた。大川の水がときたま、思いだしたように石垣を叩き、低い呟きの音をたてた。

「奉公が辛いのはどこだっておんなしこった、おかみさんの口の悪いのは癖だし」と栄二はつかえつかえ云った、「それにおめえ、女なんでもともと、——車だ」

栄二がさぶの腕に触り、二人は立停つて川のほうへよけた。からの荷車を曳いた男がうしろから来て、二人を追いついていった。

「腕に職を付けるのは辛えさ」と栄二は続けた、「考えてみな、葛西へ帰ったって、朝から晩まで笑ってくらせやしねえだろう、それとも百姓はごしよう楽か」

「葛西のうちなら」とさぶが云った、「出ていけなんて云われることだけはありやあしねえ」

「ほんとにそうか」

さぶは返辞をしなかった。栄二も返辞を期待していなかった。さぶは葛西にある実家のことを考えてみた。腰の曲った喘息持ちの祖父、気の弱い父と、男まさりで手の早い母、朝から母と喧嘩の絶えない口やかましい兄嫁、三人いる弟妹と、呑んだくれの兄と、五人もいる甥や姪たち。うす暗く煤だらけな、古くて狭くて、ぜんたいが片方へ傾いている家や、五反歩そこそこの瘦せた田畑など。さぶは途方にくれ、しゃくりあげながら、またあるきだした。

「おめえにやあ田舎がある」いっしょにあるきながら栄二が云った、「どんなうちにしる帰るところがあるからいい、だがおらあ親きようだいも身寄りもねえ独りぼっちだ、今年の春、おらあ

店を追ん出されるようなことをしちまった、追ん出されるか自分でおん出るか、どっちか一つという、とんでもねえことをしちまったんだ」

さぶはそろそろと振り向いて、栄二の顔を見た。好奇心からではなく、戸惑ったような眼つきであった。栄二はふきげんな、怒ってでもいるような口ぶりで、自分が去年から幾たびか帳場の錢をぬすみ、それを主婦のお由にみつかったのだ、と告白した。

「わこく橋の側の堀っぶちに鰻の蒲焼の屋台が出る」と栄二は続けた、「おらあ蒲焼の匂いを嗅ぐとがまんができなくなるんだ」

通りがかりにその匂いを嗅ぐと、喰べるまでは胃の腑がおさまらない。気持もおちつかず、することが手につかない。まるで病氣のようになってしまい、ときには手足がふるえだすことさえあった。帳場の錢箱から錢をつかみ出したのはそういうときで、去年の秋から十二、三たび盗みだしたろうか、食いたい一心で悪いことをしたとは思わなかった。それがこの二月、主婦のお由にその部屋へ呼ばれた。

「おかみさんは小言は云わなかった」と栄二は泥でも噛むように、顔をしかめながら云った、「——去年の八月五日と、昨日、おまえが帳場でやったことをあたしは見たよ、もうあんなことはおよし、欲しかったらあたしあげるから、あたしのところへそう云っておいで、って、——それっきりだった」

お由は二度だけしか見なかったのだろうか、それともすっかり知っていて、わざと知らないふうをよそおったのか、いずれにもせよ、栄二は死ぬほど恥じ、もう店にはいられないと思った。

自分をぬすつとだなどとは考えもしなかったが、錢箱から錢をつかみだした自分の姿が、あさましくて恥ずかしくて、そのまま店にいる気になれなかったのだ。

「だが、店をとびだしてどこへゆく」と栄二は続けた、「おらあ八つの年、大鋸町おおのこで夏火事にあり、両親と妹に焼け死なれた、おれ一人は白魚河岸しろうなぎしへ釣りにいって助かったが、ほかに身寄りは一軒もなかった、おやじは伊勢から出て来たと云ってたが、伊勢のどこだかおらあ覚えちゃあいねえし、覚えていたって頼ってゆけるもんじゃあねえ、おらあそのときくれえ自分にうちのねえことが悲しかったたあなかった」

「知らなかった、おら、ちっとも知らなかった」とさぶが呟いた、「——それで栄ちゃんは、がまんしたんだね」

「錢も二度とはぬすまなかった」

二人は横網の河岸まで来てい、さぶが立停つて、地面をみつめ、濡れて重くなった草履の先で、地面を左右にこすった。

「おら、思うんだが」と彼は心のきまらない口ぶりで云った、「——小さいじぶんおふくろにぶたれたことがある、弟のやつがいたずらをして、それをおれがしたもんだと思つてぶった、おら、泣きながらおれのしたことじゃあねえって云って、それから、弟のしたことだとわかったとき、おふくろは平気な顔で云った、それじゃあおまえはこれまでに、ぶたれるようなことは一度もしなかったっていうのかい、ってさ」

「女なんてそんなもんだ」と栄二が云った、「撫なでた手でつねるし、つねった手で撫でるような

ことをする、そしてどっちもすぐに忘れちゃうんだ、——少しはおちついたか、さぶ、もうここいらで帰ってもいいだろう」

さぶは不決断にううと云った。

「ありがと」とさぶはよく聞きとれない声で云った、「ごめんよ、栄ちゃん」

「こんどは黙ってとび出さねえでくれよ」と栄二は云った、「これからはなんでもおれに相談してくれ、力になるからな」

さぶはゆっくりと頷いた。

二人は引返した。そして両国橋まで戻ると、うしろから十二、三になる少女が追って来て、せいせいと喘ぎながら声をかけた。

「この傘をさしなさいよ」と少女はから傘を二人のほうへ差出した、「姉さんのとこへ持ってゆくんだから、方角ちがいじゃだめだけれど、さあ、さしなさいよ」

栄二は少女を見た。自分でさしている傘は穴があいていた。着ているのも継ぎのあたった青梅の古袷で、帯はよれよれだし、はいている下駄はちびたおとな物で、それもすっかり鼻緒がのびているから、泥のはねた足指をまむしにしていた。

「いらねえよ」と栄二が云った、「おれたちは小舟町へ帰るんだ、さっさとこっちまいな」

「あら、ちようどいいじゃない」と少女はうれしそうに笑った、「あたしは堀江町よ、堀江町のすみよしっていうお店に姉さんが勤めているの、だからあたし、あんたたちのうちまで送っていいのよ」

「うるせえな」と栄二が云った、「傘なんかいらねえって云ってるじゃねえか」

「だって二人ともびしょ濡れじゃないの、ねえ、これをさしてらっしゃいよ」

「さぶ」と栄二が云った、「駆けようぜ」

二人は小雨の中を走りだした。

「ばかねえ」と少女がどなった、「いいから二人とも濡れてらっしゃい、いくじなし」

栄二とさぶとは、そのとき同じ十五歳であった。少女のことは二人ともすぐに忘れてしまった。

一 の 二

二人が二十歳になった年の二月十五日。生れて初めて、いっしょに外へ酒を飲みに出た。酒が初めてなのではない、それまでも祝い日などに、店で酒の出るときは盃さかずきに二つか三つは舐なめたことがあった。けれども外へ出て、手銭で飲むようなことはなかった。半分は恐ろしくもあったが、主人の芳兵衛に禁じられていたからである。軀からだのかたまらないうちに酒を入れると骨がやわになる、はたちになるまでは飲むな、というのが口癖であった。

芳古堂は表具ひょうぐと経師きょうしとで、格も高く、手堅いので知られていた。先代からのきまったとく、先と、当代知名な五、六人の書家や絵師。老舗らひやの骨董屋こっとうやとか武家、大店おほだななどに限り、安い仕事はいっさい断わるというふうであった。したがって、八人いる職人たちの儀ぎもきびしく、みな子飼こけいいから育てられ、読み書きはもちろん、生け花、茶の湯までひととおりで習わされ、書画のよしあし

なども、小さいころから実物について教えられた。——いま店にいるのは八人、職人がしらが和助といつて二十九、次が多市で二十七、それから重七、五郎、栄二とさぶが二十で、下に十七歳の伝六と十五歳の半次がいた。そのほかに店から出て、かよいで来たり、独立して店を持つてゐる者が十三人おり、芳古堂の仕事がたて混んだり、特別な注文があつたりすると、その十三人の中から適当な者が手伝いに呼ばれた。

店のしきたりがそういうふうなので、職人たちの日常も規則ただしく、毎月十五日と一日のほかは、夜遊びに出ることも禁じられていたし、二十歳からは夜食に一本の酒が付くけれども、それ以上は一滴も飲ませなかった。念には及ばないだろうが、こういう生活をきちんと守る者ばかりはいない。仕事は夕方の五時限り、どんなに仕事^たが溜^たまつていても、五時になればやめてしまい、あと片づけをして銭湯にゆき、夕食をしたあと、九時に寝るのがきまりになっていた。寝るまでの時間は、本を読むとか習字をすとか、碁や将棋をさすとか、自分たちの好きなことをしていいのだが、中には店を抜け出して、酒を飲んだり女遊びをしたりする者がなくはなかった。

——そういうことも主人の芳兵衛は知つていて、たいていの場合にはなにも云わないが、ぬけ遊びがたび重なると、しぜん仕事にひびくので、そのとき初めて小言を云い、それでも行状が改まらないと暇を出してしまう。五年のうちに二人くらいはそういう職人がいて、これらは芳古堂にいた、と云うことも許されないのであった。

栄二とさぶは心がときめいていた。

「は、たちになつたなんて、へんな心持だな」とさぶがまだるっこい調子で云つた、「おら、思う

んだが、十六で月代を剃ったときよりもへんな心持だ」

「そうだな」と栄二が云った。

二人は千筋の手織り木綿の袷に双子縞の羽折、小倉の角帯をしめ、麻裏草履をはいていた。ちやうど黄昏どきで、人の往来の多い小舟町の通りを東のほうへ、かくべつ目的もなくあるいていた。とにかく両国広小路へでもいつてみようか、と思っっているようであった。

「おめえはいいな、栄ちゃん」とさぶが云った、「おめえはもう屏風にかかれる、襖の下張りならいちにんめえだ、ところがおらときたら、いまだに糊の仕込みだ」

「それも仕事だぜ」

「おら、思うんだが、水の中で袋を揉みながら、ときどき自分がやりきれなくなるよ、は、は、ちになつてこのざまかつて」

「それも仕事だよ、さぶ」と栄二が云った、「表具や経師は糊の出来のよしあしが仕事の仕上りをきめるんだぜ、おめえわかつていねえのか」

「そりゃあそうだが」

「わかつてたらぐちを云うなよ」と栄二は云った、「糊の仕込みで日本一になれば、それはそれで立派な職人なんだ、おめえ日本一の糊作りになれよ」

「そりゃあそうなんだが」

しかし芳古堂の職人となれば、表具とか屏風、屋敷襖なども覚えたい。そう云いたかったのだ。が、さぶは口には出せなかった。

「ちよつと」と栄二が云つて立停つた。

堀江町と新材木町のあいだに堀がある。その堀端に五、六軒、小料理屋がとびとびにあって、その端の一軒で「すみよし」と紺地に白く、仮名で染め抜いた半のれんを、軒先に掛けている女がいた。小柄な軀もほっそりしているし、襷を掛けてあらわになった二の腕も、裾を端折つた黄八丈の着物の下に覗いている白い脛も、ほっそりと柔軟そうにみえた。

「なんだい、栄ちゃん」

「すみよし」と栄二は口の中で呟いた、「聞いたことがあるようだな」

「柳橋の料理屋だよ、すみよし、とくい先じゃあねえか」

「そうじゃあねえ、柳橋じゃあねえ、どこかよそで聞いたことがあるんだ」

のれんを掛け終つた女は、足許の盛り塩をよけて、家の中へはいつた。栄二は記憶を呼びおこそうとするように、眼を細めて暫く考えていたが、どうしても思ひだすことができないようです。そつと舌打ちをすると、まあいいや、はいつてみようと言ひ、さぶを促してそちへあるいていつた。

店へはいると、四十がらみの男が、灯を入れたはちけんを天床へ吊りあげているところだった。三間に五間くらい土間に、飯台が二た側、おのおの左右に作り付けの腰掛が据えられ、蒲で編んだ円座が二尺ほどの間隔をとつて置いてある。客が多くてもぎつしり詰めず、ゆとりをおいて飲めるように按配してあるらしい。右手に竹で格子を組んだ板場、つきあたりにまたのれんが掛けてあり、これは浅黄に紺で「すみよし」と書いてあつた。

「早かったかな」店へはいった栄二は、はちけんを吊りあげている男にきいた、「まだ始めないのかい」

「いらっしやい」と男はいさましく答えた、「どうぞ」

そして奥のほうへ向って、お客だよと、大きな声でどなった。栄二はさぶの肩を押し、飯台の一つを選んで、その奥の端のほうへ腰を掛けた。すぐに女が二人、自分の髪へ手を触れながら出て来て、あいそを云いながら注文をきいた。さっきのれんを掛けていた女ではなく、一人は十八、九、一人は二十二、三で、どちらも小太りで、白粉と香油をつよく匂わせていた。栄二は酔の物とうま煮で酒を二本と云い、云いながら赤くなった。

「あたしあんたのこと知ってるわ」と年嵩としかきのほうの女がさぶに云った、「あんた小舟町の芳古堂のしとでしよ」

さぶは戸惑ったように栄二を見た。女の一人は注文をとおしにゆき、年嵩のその女は腰をかけた。

「そうじゃねえさ」とさぶが云い、慌てて云い直した、「いや、本当はそうだよ、今日は親方やおかみさんに許されて来たんだ、こっちは栄ちゃん、おらあさぶっていうんだが、二人とも今年でちようど」

「よせよ」と栄二が云った、「よけいなことを饒舌しゃべるなよ」

「あら、いいじゃないの」と女が云った、「さぶちゃんに栄ちゃんね、あたしおかめ——仇名あだなじやなくて本名なのよ、どうぞよろしく」